様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年　6 月　27 日現在

機関番号：34416
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2008　～　2010
課題番号：20720192
研究課題名（和文）
明朝朝貢体制下の入貢地から見た地域間交流の基礎的研究
研究課題名（英文）
Fundamental Study of Interregional Exchanges Viewed from Gateways for Tribute under the Tributary System of the Ming China
研究代表者　岡本　弘道（OKAMOTO HIROMICHI）
関西大学・文化交渉学教育研究拠点・研究員
研究者番号：70469237

研究成果の概要（和文）：
本研究は、14 世紀後半から 17 世紀前半にかけて明朝が採用した朝貢体制の枠組みを理解するための基礎的作業である。各朝貢国・朝貢勢力から派遣された朝貢使節が明朝の領域に入る際必ず通るべき窓口、「入貢地」に注目し、首都周辺地域よりむしろこれら周縁の入貢地に重点を置いて、現地踏査および文献調査を行った。また個々の具体的な朝貢事例を総体として把握するための手がかりとして「朝貢事例表」に着目し、『明実録』に基づく朝貢事例表の作成を行った。
研究成果の概要（英文）：
This study is a fundamental work for understand the framework of the tributary system adopted by the Ming dynasty from the late 14th century to the early 17th century. It focused on gateways for tribute to the Ming, where missions dispatched by tributary states had to pass through, and conducted fieldwork and document investigation with central emphasis on these "peripheral" gateways rather than capital region. In addition, it focused on statistical studies for tables of tributary cases as a clue to put each tributary case into perspective, and tried to make the table of tributary cases based on *Ming Shi-lu*.
交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：東洋史、東アジア史、明朝、朝貢、入貢地、地域間交流、『明実録』

１．研究開始当初の背景

前近代における中国を中心とした国際体制については、早くは西嶋定生・J.K.フェアバンク等により検討されている。彼等は中国皇帝が王侯等を任命する「冊封」、そして中国皇帝に対し貢物を献上する「朝貢」が、東アジア・東南アジア等の国際秩序を規定し、さらに各地域の政治・文化等を方向付けたと論じる。

一方、明清朝の朝貢体制については近代の条約体制との対比から、浜下武志による「朝貢システム」論が提示されている。浜下は中国の優越性を認めつつも、多元的な朝貢関係の連鎖とそれに伴う地域システムの形成が

ヨーロッパによる近代条約体制の導入後も東アジア・東南アジアを規定したと論じる。

また、中国では李金明・李雲泉・陳尚勝など、近年多くの研究が上梓され、一つのトレンドとなりつつある。中国においては「朝貢貿易」における貿易の側面が重視されつつ、方法論としては典籍史料に基づく制度研究に偏るという一種の「ねじれ」が存在した。その中で正面から制度研究に取り組んだのが李雲泉『朝貢制度史論』であり、朝貢制度を通史的に検討した点で画期的である。『朝貢制度史論』は通史とはいえ、その議論の中心は明清代に置かれており、朝貢制度を総合的に論ずる上で明代の朝貢体制の解明が不可欠であることを示している。

以上の諸研究は明朝の朝貢体制について多くの知見を提供し、それが東アジア・東南アジア等の地域間交流に大きな影響を与えていること、さらにその構造の基礎を規定していることを示している。

それらとは別に、特定の朝貢国に即した研究も数多く存在する。特に史料の豊富な日明関係に関して極めて盛んであり、小葉田淳・田中健夫・村井章介・鄭樑生をはじめ枚挙に暇がない。これらの研究成果は日明関係史に留まらず明朝史・中央ユーラシアの交流史に敷衍されている。しかし当時にあって特殊な存在であった日本の事例を典型として全体を論じる点、また研究関心が中国東南の海域交流に偏っており、内陸との交流を描く視点が不十分であるという点でバランスを欠いている。

近年は岩井茂樹・上田信等によって内陸と沿海の動向を連動するものと捉える研究が積み重ねられつつあるが、実証研究の蓄積と地域間交流システムの議論の間にはまだ埋めるべき溝が存在している。

２．研究の目的

境界領域に注目して、地域間交流・交易の実態を解明しようとする研究は、個別地域に対しては数多く存在する。しかし、本研究の特色はそれらの境界地域を総体的・網羅的に研究対象として比較検討を行う点にある。

前述のように明代の朝貢体制については相当数の先行研究があるものの、その対象及び問題関心は偏っている。また網羅的な朝貢事例表も存在せず、情報量の不十分な『明史』に基づく朝貢状況の把握に留まっており、十分な実証研究の上に積み重ねられたものとは言い難い。

本研究においては、特に明朝の朝貢体制およびそれと連動する広域交流システムのあり方を全方位的に検討するものである。同時に相当の文献史料が利用可能である中国側の入貢地に注目することによって、実証面でも必要十分なレベルでの相互比較が可能となる。一般に朝貢を行う側は主に経済的な動機から、朝貢を受ける側は主に政治的な動機から朝貢行為に関わるとされるが、もちろん各朝貢主体と明朝との関係によって実態は異なる。このように朝貢主体毎に異なり、また朝貢主体と明朝の態度の間にも構造的なズレが存在する以上、そのズレを現実の朝貢行為の中で調和させる存在として、境界・媒介地域としての入貢地の果たした役割は極めて大きなものがあろう。

本研究の遂行によって、それらの実態が相互比較可能な形で明らかとなり、当時の広域交流システムを明朝側、あるいは日本など特定の地域の視点からのみではなく、総体として把握することが可能となる。さらにはその総体としての理解を踏まえて各地域の持つ特性や志向などについても理解がより深まることとなろう。

３．研究の方法

本研究プロジェクトは、以下の三つのアプローチから研究を進める。

(1)各入貢地に即した文献資料の捜索・整理と相互比較

明朝において「貢道」と位置付けられた入貢地、具体的には寧波・福州・広州等の沿海港市及び義州・憑祥州・大同等の内陸城市について、相互比較しながら検討する。この作業を通じて、明朝の朝貢体制及びこれと連関するアジア広域交流システムの構造を媒介者・媒介地域の視点から明らかにする。同時に沿海と内陸においてその機能にどのような共通性・差異性が見いだせるかを明らかにする。

(2)各入貢地における現地調査

文献資料の整理・比較と並行して、各入貢地の現地調査を行なう。史跡・寺廟・碑刻・都市構造及び地理的諸条件の調査を通じて、域間交流・交易の結節点としての各入貢地の特性を明らかにする。さらに明代の関連文献資料と比較検討することによって、文献史料だけでは明らかにしえない境界・媒介地域での交流のあり方を明らかにする。

(3)『明実録』に基づく網羅的な朝貢事例表の作成

以上の各入貢地に即した検討・調査と併せて、明朝の編年体記録である『明実録』から朝貢事例記事をピックアップし、網羅的な朝貢事例表を作成して、各入貢地の朝貢体制における位置づけを総体的・統計的に把握する。

作成した朝貢事例表は、データベースとしてインターネット上もしくは冊子体で広く公開する。

４．研究成果

本研究の成果は以下の通りである。

(1)文献調査

明朝の朝貢体制に関する基本文献としては、後述の朝貢事例表データベースにて基本文献として活用する『明実録』があり、明朝朝廷の編年体資料として朝貢事例の記事を多く含んでいる。また、制度的な記録としては『大明会典』があり、朝貢国・朝貢勢力の一覧やその沿革・朝貢品や回賜品について豊富な情報を提供している。この他、網羅的な記述を含むものとしては『礼部志稿』などが知られている。また明代後期に多数編纂された類書等にも、類似の記述が多く取り込まれている。

本研究において、特に注意を払って調査を行ったのが『外夷朝貢考』である。これは上海図書館に鈔本が所蔵されており、撰者・成立経緯等は不明だが、その内容からみて恐らく嘉靖(1522-1566)年間の後半に成立したものと思われる。他の文献の朝貢関連の記述と比べて独特の内容を含んでおり、そのテキスト的性格も含めて研究論文として発表する予定である。

入貢地に関連する歴史文献として、量的に大きな部分を占めるのが地方志である。地方志は特に明清期において各地で繰り返し刊行されており、その多くが現存しており利用可能である。本研究においては、(2)の現地踏査に先立って調査地を対象とする地方志文献を調査し、関連史跡についての情報を得た。現在の現地の状況は必ずしも当時の史跡を保存するものではないが、地理的位置の確認等を行い、朝貢行為の空間的把握に努めた。現在では各地で歴史地理的研究が進んでおり、さらにそれらの成果を取り込むことによって、各入貢地の相互比較が可能となろう。

(2)現地踏査

本研究の中でも重要な位置を占める明代の「入貢地」周辺地域への現地踏査は、以下に挙げるように計6回実施した。

①2008年 9月 12日～23日　雲南省現地巡検調査
②2009年 2月13日～27日　遼寧省及び中国東南沿岸部の現地巡検調査
③2009年 9月16日～24日　甘粛省・陝西省現地巡検調査
④2010年 2月 5日～18日　四川省・広西壮族自治区現地巡検調査
⑤2010年 8月 8日～19日　甘粛省現地巡検調査
⑥2011年 2月 20日～ 3月 3日　北京市周辺・山西省・河北省現地巡検調査

①ではベトナム側のラオカイから陸路中国側の河口に入り、その後主にバスと一部飛行機を用いて、雲南省都の昆明から景洪（西双版納タイ族自治州の中心都市）・磨憨（ラオスとの国境の町）・潞西（徳宏タイ族景頗族自治州の中心都市）・騰衝（保山市所轄。いわゆる雲南＝ビルマルートの貿易拠点）等について、現地踏査を行った。これらの地域は明代には土司・土官の管轄地域であり、いわば半独立の勢力として明朝に従属し、定期的に朝貢を行っていた。現在もいわゆる「少数民族」が社会の中心を占める地域であり、また中国国境を越えてベトナム・ラオス・ビルマ等とも日常的な往来がある。踏査に当たっては土司・土官にかかわる史跡や寺院等と共に、現在の国境関門についても可能な限り実見し、往時の「入貢の窓口」のイメージを深める参考とした。

②ではまず朝鮮の入貢地である「義州」を望む丹東市にて、虎山長城と九連城遺址を踏査した。次いで遼寧省都の瀋陽に入り、女真向けの開市が行われていた開原の旧城地域を踏査した。さらに浙江省の温州に移動し、瑞安にて琉球使節のために建設されたという「東安館駅」が存在したと思われる地点を確認した。福州、泉州、厦門を経て広州を踏査した。

③では西域諸国の入貢ルートとして、甘粛省蘭州周辺、西安周辺の踏査を行った。

④では四川省の成都および土司が置かれていた天全県の巡検を行った。また広西壮族自治区では南寧およびベトナムの入貢地であった憑祥の友誼関の巡検を行った。

⑤ではまず西域諸国の入貢地としての嘉峪関の踏査を行った後、地球環境学研究所の調査チームと合同で張掖周辺・蘭州周辺地域の踏査を行った。

⑥では、北京市内の朝貢使節関連史跡等を踏査した他、山西省大同市・市北辺の馬市・長城跡を踏査し、また河北省張家口市と秦皇島市の山海関の巡検を行った。

これらの巡検を通じて、単に「朝貢」という時の朝貢国・朝貢勢力と中国皇帝の間の関係だけでなく、周縁地域における実態としての人・モノ・情報の往来について、それぞれの地理的環境を踏まえた理解を深めることができた。特に、入貢地としての関門（山海関・嘉峪関・友誼関等）、入貢地における使節滞在用の館駅（懐遠駅・柔遠駅・東安館駅・四明駅／安遠駅等）については相互比較に有

用な多くの知見を得た。駅伝ルート上の館駅についても、遺址が現存しているものも含めて複数実見することができた。現在これらの地域の多くは必ずしも国境地域というわけではないが、往時を偲ばせる往来や交流も存在しており、そのようなローカルな交流を基盤として朝貢が執り行われていたのではないかとの所感を得た。これらの現地踏査を通じて全ての「入貢地」を網羅したわけではないが、近年質量共に豊富に成りつつある歴史地理的研究をさらに取り込みつつ、朝貢の総体的理解につなげていく足掛かりとなった。これらの踏査データについても、整理の上順次ウェブサイト上に公開する予定である。

(3)朝貢事例表データベース

明代の朝貢事例表に関する従来研究は、既に「明朝の「朝貢体制」の体系的把握に向けて――『明実録』による憲宗期朝貢事例表の作成を中心に」の中でまとめてあるが、概して『明史』に採録された不完全なデータに基づくもの、あるいは特定の朝貢国に限定されたものが多く、質量ともに不十分と言わざるを得ない。本研究においては、原則として全ての朝貢事例を採録する（という建前になっている）『明実録』を基本資料に、あらゆる朝貢国および羈縻衛・土司・土官等の朝貢勢力について、網羅的かつ詳細なデータを含む「明代朝貢事例表データベース」の作成を目指し、作業を行ってきた。そのほんの一部の成果が「明朝の「朝貢体制」の体系的把握に向けて――『明実録』による憲宗期朝貢事例表の作成を中心に」の憲宗期朝貢事例表であるが、これを見てもわかるように紙媒体によって完全な朝貢事例表を公開することは極めて困難なことと言わざるを得ない。よって本研究ではインターネット上で閲覧・検索等を可能にするオンライン版の朝貢事例表データベースを用意し、近い将来に順次公開する予定である。『明実録』中の朝貢事例の記述も完全とは言い難く、個別の朝貢事例を抽出する作業は相応の困難を伴うが、オンライン版の朝貢事例表データベースが完成すれば、『明実録』以外の漢籍資料のデータや各朝貢国側の資料データとも連係させることによって、情報自体の精度をさらに上げることも可能になり、ますます朝貢に関する研究の水準向上に資することになろう。

(4)学会発表・口頭報告

本研究に関連して行った学会発表・口頭報告は以下の通りである。

2008年4月に大阪大学で開催された大阪大学歴史教育研究会第 23 回例会／海域アジア史研究会 2008 年 4 月例会において、「冊封体制と“勘合貿易”――日本史の呪縛を超えて――」と題する報告を行い、明代の東アジア国際交渉を考える際の「冊封体制」「勘合貿易」という概念の妥当性と限界を通じて、明代の朝貢体制の持つ特性を論じた。

2009 年 8 月に韓国・テジョンで開催された International Convention of Asia Scholars 6 において、“The Function of Ryukyu Kingdom in the Regional System: Peripherality as its Strategy”と題する報告を英語で行い、「周縁性」をテコにした琉球王国の外交戦略と地域間交流システムのありようを論じた。

2009 年 11 月に中国・青島で開催された第 12 回中琉歴史関係国際学術会議において、「朝貢ルートの観点から見た琉球の対明朝貢の意義――他の朝貢国との比較を中心に」と題する報告を、日本語と中国語によって行い、入貢地に着目した場合に琉球が持つ独自性について論じた。

2009 年 12 月に那覇で開催された第 12 回中琉歴史関係国際学術会議において、「八木光教授の報告「進貢船の性能について」に対するコメント」と題するコメント報告を行い、琉球の朝貢に不可欠の要素であった琉球進貢船の研究における文献史学的研究状況を整理し、文理融合による共同研究のさらなる可能性と必要性について論じた。

2010 年 3 月に大阪で開催された琉球大学「江戸立探検隊」大阪シンポジウムにおいて、「『琉球の時代』の琉球とアジアの視座」と題する報告を行い、朝貢を含む琉球の海上活動を朝貢体制全体、アジアの国際システム全体の中に位置づけていく必要性を論じた。

(5)論考・刊行物

まず論考としては、琉球が明朝との朝貢関係を確立し、特に朝貢にまつわる様々な優遇措置を受ける過程、それらの優遇の状況が変化していく 14 世紀末～15 世紀の状況について論じた“Foreign Policy and Maritime Trade in the Early Ming Period: Focusing on the Ryukyu Kingdom”、1609 年の薩摩侵攻以後の琉球王国の構造的変化について論じた“Structural Transformation of Ryukyu Kingdom in the 17th and Early 18th centuries: As an Intersection of Cultural Interaction”、及び従来の朝貢表に関する研究の整理と『明実録』に基づく憲宗期の朝貢事例表を作成・公開する「明朝の「朝貢体制」の体系的把握に向けて――『明実録』による憲宗期朝貢事例表の作成を中心に」を発表した。その他前述のように『外夷朝貢考』に関する研究論考を近日中に公開する予定である。

図書としては、琉球と明朝中国との朝貢関係を軸に琉球王国の海上交渉史に関する研究をまとめた研究書『琉球王国海上交渉史研究』を2010年3月に刊行することができた。また、2011年3月には琉球王国の朝貢品・交易品の中から琉球弧域内の産品を抽出して考察し、その作業を通じて琉球弧域内の社会システムと琉球王国の朝貢の関連性を論じた論考「琉球王国の交易品と琉球弧の域内連関」を含む概説書『東アジアの民族的世界―境界地域における多文化的状況と相互認識―』が刊行された。

これらの成果を踏まえ、さらに内陸諸国・諸勢力との比較研究を進めていくことによって、明代の朝貢体制に関する研究に一層の厚みを与え、総体としての地域間交流システムの実態と各地域の持つ特性を明らかにすることができると考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

(1) 岡本弘道、「明朝の「朝貢体制」の体系的把握に向けて――『明実録』による憲宗期朝貢事例表の作成を中心に」、『東アジア文化交渉研究』、査読無、第4号、2011年、415-446頁
http://ci.nii.ac.jp/naid/110008429908

(2) OKAMOTO Hiromichi, "Structural Transformation of Ryukyu Kingdom in the 17th and Early 18th centuries: As an Intersection of Cultural Interaction", Cultural Reproduction on its Interface: From the Perspectives of Text, Diplomacy, Otherness, and Tea in East Asia, 査読無, 2010, pp.3-17.

(3) Okamoto Hiromichi, "Foreign Policy and Maritime Trade in the Early Ming Period: Focusing on the Ryukyu Kingdom", *ACTA ASIATICA*, 査読無, No.95, 2008, pp.35-55.

〔学会発表〕（計5件）

(1) 岡本弘道、「『琉球の時代』の琉球とアジアの視座」、琉球大学「江戸立探検隊」大阪シンポジウム、2010年3月8日、大阪：ホテル阪急インターナショナル

(2) 岡本弘道、「八木光教授の報告「進貢船の性能について」に対するコメント」、にんぷろ沖縄シンポジウム「東アジアの海域交流――琉球という視点から」、2009年12月12日、那覇：沖縄県立博物館

(3) 岡本弘道、「朝貢ルートの観点から見た琉球の対明朝貢の意義――他の朝貢国との比較を中心に」、第12回中琉歴史関係国際学術会議、2009年11月22日、中国・青島：中国海洋大学

(4) OKAMOTO Hiromichi, "The Function of Ryukyu Kingdom in the Regional System: Peripherality as its Strategy", International Convention of Asia Scholars 6, 2009年8月8日, 韓国・テジョン：テジョンコンベンションセンター

(5)岡本弘道、「冊封体制と"勘合貿易"――日本史の呪縛を超えて――」、大阪大学歴史教育研究会第23回例会／海域アジア史研究会2008年4月例会（共催）、2008年4月19日、豊中：大阪大学豊中キャンパス

〔図書〕（計2件）

(1) 佐々木史郎・瀬川拓郎・岡本弘道・大塚和義・中村和之・杉山清彦・大西秀之・角南聡一郎・加藤雄三、有志舎、『東アジアの民族的世界―境界地域における多文化的状況と相互認識―』、2011年、68-93頁

(2) 岡本弘道、榕樹書林、『琉球王国海上交渉史研究』、2010年、263頁

〔その他〕
ホームページ等
http://www.maritime-asia.net/

６．研究組織
(1)研究代表者
岡本　弘道（OKAMOTO HIROMICHI）
関西大学・文化交渉学教育研究拠点・研究員
研究者番号：70469237